

論文

「クルアーン」が教える人間洞察（第3回）

アフマド鈴木紘司
地域文化学会理事、マレーシア現地法人役員

（本論に掲載したクルアーンの日本語訳は著者の翻訳による。）

第3部 マッカ啓示の章

ムハンマドは40才で初めて神の啓示に接してから63才で逝去するまでの23年間という長期間にわたり連続して啓示を受けました。この期間のうち、13年がムハンマドの生まれ故郷のマッカにおいて、残りの10年が移住先のマディーナにおいて活動した時期でした。

そこで、クルアーンの全114章を区分けして、時間的には初期のマッカ時代に啓示されたものを「マッカ啓示」としてクルアーンの後半以降に配置し、後半に啓示された部分をクルアーンの前半に配置して「マディーナ啓示」と呼ぶことになりました。前述のようにクルアーンを書物として結集した際に、編集の順番が、啓示が下りた順番に沿ったものでなかったことで、学者たちは後半に置かれている「マッカ啓示」について、厳密に検証して実際に啓示された順番に並び替え、それぞれの短い啓示を初期、中期、後期と3つの期間に大別しました。

3-1 マッカ初期

創造主を確信する啓示であり、最初の第96章「凝血章」では人間の誕生を解き明かし、創造主を崇めるよう命じて「読め、筆」という知性の大切さを象徴する言葉が啓示されていました。続く第68章にも「筆」が強調されています。第73章、第74章では、神はムハンマドが預言者として独り立ちするよう励まします。そして第1章「開扉章」となり、天地終末の光景を描写する第81章「被覆章」に移ってから、第53章「星章」までの23の章が続きます。これから順次、各章を読んでいきましょう。

(1) 「第96章凝血章」(全19節)

クルアーン最初の啓示は真実を明解に叙述しています。

1. 読みなさい。「創造なされた汝の御主の御名にて。
2. 人間を凝血から創造し給うた」
3. 読みなさい。「そして汝の御主は最も高貴であられる。
4. 筆により教示された御方。
5. 人間にまだ知らないことを教示し給う。
6. 断じて。本当に人間は不遜きわまる。
7. まったく見るのは自分だけで充分とする。
8. 本当に汝の御主の御許へ帰還するのに。
9. 汝は見たか、妨げるその者を。
10. しもべが礼拝する時に。
11. 汝は見たか、本当に彼が導きの上にいるのか。
12. あるいは敬神を命じているのか。
13. 汝は見たか、本当に嘘をつき背を向けるのを。
14. 彼は知らないか、まことにアッラーが見給うことを。
15. 断じて。もしそれを止めなければ、その前髪を必ず我が掴もう、
16. 嘘つきで罪深い前髪を。
17. さあ、呼ぶがよい、その身寄りを。
18. やがて我は呼ぼう、地獄の看守を。
19. 断じて。彼に従ってはいけない。そして額ずきひれ伏し近づくがよい。

第96章：1～19節〕

本章は二つの部分、1～5節と6～19節の二組から構成され、初めての啓示が最初の5節まで、6節以降は別の時点に下り、付加されたというのが定説です。伝承によるとムハンマドは、不惑の40才を迎える頃から不思議な兆しが現れ、眠りの中で夜明けの輝きを見ることに始まり、独りになるのを好んで、水と食料を携えて家族の元を離れ、マッカの北はずれにそびえるヌール山へ行き、山頂のヒラー洞穴で瞑想に身を委ねたとされます。そして西暦610年の神聖な断食月（ラマダーン月）の夜半に、何者かが立ち現れ、喉元を強く押さえ付けながら「読め」と命じました。さらに激しく押さえられた後に、この凝血章（1～5節）の不思議な言葉が克明にムハンマドのムハンマドの耳に残されました。

凝血章（1～5節）

第1節：「読め」と命令されて読むことの大切さが強調され、創造主の御名をもって読み始めよと命じています。最初に「読め」の動詞(QRA)から派生した名詞が「クルアーン（読むもの）」の原義です。

第2節：人間は「凝血（アラク＝固まった血の塊）」から創られたというのです。古来、哲学の命題となってきた「人間はどこから来たのか」への明快な解答であり、人間の原型が小さな固まった血の物体であり、それが発育して胎児となり誕生するという医学的な解説でした。

第3節：人間をお創りになった御主は、最も高貴な存在であるとの説明です。

第4節：そして人間に筆を持つことを教示したと続きます。「筆（カラム）」とは「書くこと」の象徴であり、人間が筆をもって記録に留める大切さを教えています。人間の知性は最初に音声を発して「読むこと」を覚え、次いで「書くこと」により思考を発展させていきます。

第5節：人間がいまだに知らないことをこれからも教えるというのです。知性により未知のものが既知となって、知識が蓄積されていくと述べています。これは使徒ムハンマドに啓示が下されることを示唆するとも解釈されています。

最初期に啓示されたクルアーン「第96章」が明らかにしたのは、人間にとり「読み、書き」が重要であり、この実践によって人間の知性が進化を遂げることで、この実践に導くのが「創造主」、つまり神であるという重大な宣言でした。40才になってから、学び、知ることの重要性を説いた預言者ムハンマドは、自ら率先して読み書きの教育普及を社会に植え付けました。自分が受けた啓示の言葉を周囲の人々に暗記させることを実行に移したのです。今日、手に取っても分厚いクルアーンを、ムハンマドは23年間の長きにわたり人々へ教え続け、毎日の礼拝で朗読して人々に読み聞かせました。それを暗唱した各人が家庭に戻り反復、練習を重ねて普及させていったのです。

ちなみに現存する世界最古の大学の一つがエジプトにある「アズハル学院（Al-Azhar University）」で創立が970年です。広く学生に門戸を解放して20世紀前半まで隣接するモスクに座す教授を囲んで、学生が車座になり随時に授業を受けていました。授業内容は、論理学、哲学、神学、法学、文法学、天文学などで、随意の入学、出席が許されて知識を獲得した学生が教師、導師（イマーム）となり世界各地の教育普及に貢献しました。例えばマレーシア政府は1960年代にカイロに立派な学生寮建物を設営し、優秀な学生にはさらにロンドンへ留学させていました。21世紀の教育制度には時間的な速度を織り込む必要がありますから、日本でも英才教育に特別枠を設ける戦略的な配慮が急務かもしれません。

凝血章（6～19節）

後半部では人間の本性を教えます。

クルアーンは、神秘的で難解な事柄を取り上げた神学中心の書物に見えますが、それだけでなく人間本性の深い洞察を記述しています。別の時に付加されたという後半部分を読むと、コロナ禍の今をまざまざと語る人間の本性が指摘されています。

第6節：神の恩寵に対して人間の本性は、思いあがりも甚だしく不遜で尊大でいかに罪深いかをはっきりと断言しています。

第7節：人間は自分だけを見て他人を思いやらずそれで事が足りたとして、他人への配慮を一切しないとの指摘です。現代社会ではこの「エゴイズム」の範囲と量が極大化し個人の域を超え、国単位の大きさまで広がっています。“自分の国さえ良ければよい”の傾向が強まりコロナ禍の期間で一層、露呈された感があります。「アメリカ・ファースト」を声高に叫ぶ、トランプ大統領は当初から“勉強嫌い、税金逃れのプレー・ボーイ”で有名でしたが、その本領を十分に発揮して権力への執着と自己保身を優先しました。米国がそれまで掲げてきた理想の「民主主義国家」の看板を「私利私欲追及国家」へ塗り替えました。資本国家の財力を前面に打ち出し、弱小国や国際機関への支援金を簡単に切り捨て、戦乱の拡大を助長する武器輸出に専念する人物で、本節がそのまま当てはまる典型です。

第8節：すべての人間は必ず死んで最終的に御許へ帰ることになり、幾ら金を稼いでも来世には一銭も持っていきません。復活の日には審判があり現世での行為を評価する清算がなされます。関連の伝承に次のようなものがあります。「人間の中に充足を感じない2種類の人々がいる。それは知識を求める学者と、現世を求めてやまない者である。だが両者は同じでなく前者は恩寵を増やし、後者は背信につながる。」

第9、10節：礼拝を妨げる男の行動は正しい導きを拒否して神を崇める行為に叛くものです。

第11、12節：男は導きの上になく、敬神をせずに、神を畏れないで真逆の行為をしています

第13、14節：男が嘘をつき背信するのは、御主の監視を考えていないからです。

第15、16節：その行為を止めなければ、「復活の日」には、前髪を強く掴んで引きずり廻して燃えさかる地獄まで連れていくとの恐ろしい警告です。特に「前髪（ナーシヤ）」と挙げたのは、前頭部にある脳が嘘を吐く根源という注釈があります。

第17、18節：男が「俺は身寄りの郎党が多い」と威張ったのに応じて「呼ぶがよい」と答え、ならば当方は、地獄の番をする天使を呼ぶと預言者の回答でした。

第19節：断じて悪い者の行為に従ってはならず、御主の前に額ずいて敬虔な心で祈祷を捧げることが大切と教えています。電腦（コンピューター）を発明して無限に広がる大宇宙のほんの末端を探る手段を編み出したことで、最近の人間も敬神をおろそかにして尊大、傲慢にならないことが必要というのです。

(2) 「第68章、筆（全52節）」

冒頭に重要な事柄を反復して示します。

マッカ啓示の最初の第96章に続き、クルアーンで第2番目に降臨した章が「第68章、筆」になります。二つの章の間には中断の期間がしばらくありましたが、どれほどの期間かについて定説はありません。章名「筆（カラム）」の他に冒頭に置かれた神秘文字「ヌーン（N）」の呼称もあります。各章がどういう単語で始まるかは大切な注目点です。最初の第96章は「読め」という動詞命令形でしたが、2番目の章は、アラビア語アルファベット「ヌーン（N）」という文字で始まります。

1. ヌーン（N）。筆にかけて。書くことにかけて。
 2. 汝は汝の主の恵みにより、もの憑きではない。
 3. そして汝には絶えることない報奨がある。
 4. そして汝こそは最高の品性である。
- ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（第68章、1～4節）

第1節：N（ヌーン）の文字を選んでクルアーンの特性である誓言の形式をとっています。

「誓言形式」とは特別な定型をとる“誓いの言葉（カサム）”であり、人間が唯一神に対して誓うことで、絶対神への信念を人々に植え付ける意図を含んだ表現形式です。通常は神が創造した大自然の事象を選んで誓う定型を取りますが、ここでは「文字」を選択しています。次いで「筆」という道具を出して、“書くこと”の行為を象徴しています。

「ヌーン（N）」の意味には諸説あり、①大魚：大魚に呑まれた預言者ヨナに関連付ける。②イン

ク壺：御主は先ず筆を創って次に「ヌーン」と呼ばれる「インク壺」を創り、最後に「書くこと」を命じられた。確かにアラビア語「ヌーン文字」はローマ字の U 字に似て、インクを貯める壺の形を連想させます。③光の書板：光りから造られた「筆」が、地球の始まりから復活の日までの運命を書板に刻みこんで記録するとの注釈です。この光りで造られた筆のアイデアは今日の「光ファイバー」や「ナノ・チップ」の製造技術を連想させて興味深いものです。

「筆（カラム）」が前章に続いて再度、引用され「読む（コアア：QRA）」と並んで重要なキーワードであることが強調されています。クルアーンは最初と2番目の啓示で「書くこと」を明記して、「文字」による記録保持で人間の知性を導くように7世紀の時代に教授しているのです。

第2節：ムハンマドが“もの憑き”のような精神異常者でも呪術師でもない「知性」の確かさを保証しています。

第3節：ムハンマドに与えられる「絶えることのない報奨」とは、人類へ遣わされた預言者となり真理の導きであるクルアーン啓示を連続して下すとの解釈です。

第4節：それで、ムハンマドは最高の品格の持主と明言されています。

関連の伝承では、最後の妻アーイシャが信者たちから、預言者の品性につき質問されると「あなたはクルアーン第68章を読んでいませんか」とつねに答えていた、とあります。

現在、世界の指導者である政治家に求められるのもこうした人間の基本的品性です。政治家には人々を率いる責任が課せられますから、プラトンが主張した哲学者レベルによる国家統治は期待できなくとも、最低限の道徳的な規範を守る、ある程度の品位は不可欠と言えるでしょう。

(3)「第73章：衣を被る人（全20節）」

重要な行為に時間の要素を織り込んでいます。

不思議な言葉は連続してムハンマドの上に降りました。3番目に降臨したのが、第73章「衣を被る人」です。本章はムハンマド個人を指導するため直接に下されました。最初の啓示を受けた頃のムハンマドは、不可思議な声を聞いて驚き怖れ、一目散に家へ帰ると熱に浮かされて「衣を被せてくれ」と最初の妻、ハディースに訴えました。部屋の片隅で頭から衣を被り震えて横たわる「衣を被る人（ムッザンミル）」となったムハンマドに対し、さらなるは命令が下ります。寝ている状況のムハンマドに「起立せよ」との指示でした。

1. さあ、衣を被る人よ。
2. 立つがよい。夜間に少なからず。
3. その半分か、またはそれより少なめ。
4. またはそれより多めに。そしてクルアーンをしっかりと読誦しなさい。
5. まことに我らは汝の上に重い言葉を投げかける。
6. 本当に夜の起床はより強い動きとより明快な語り。
7. 本当に汝は昼間に長い用事がある。
8. そして汝の御主の御名を念じなさい。また主へひたすら専念しなさい。
9. 東と西の御主で神は主以外にない。だから代理人に主を採るがよい。
10. そして耐えるがよい、彼らが言うことに。良い避け方で彼らを避けるがよい。
..... (第73章、1～10節)

冒頭は再び命令形動詞で今度は「立ちなさい」から始まります。これは夜間に起きて礼拝を行い、クルアーンを読めとの指令で、夜中に起きる時間の長さを具体的に詳しく教えます。夜間の半分か、3分の1か、3分の2と選択が可能でした。アラビア語の「夜」は、“日没から始まり夜明けまで”ですが、夜の時間を用いて神からの重々しい荘重な言葉をしっかりと理解し、美しく朗誦することを要求されたのです。

第6節：夜間は昼間と違い、静寂で精神集中ができるというのです。初期の礼拝はムハンマド個人への義務とされ、そのため毎夜の起立で足が腫れて痛むほどでした。これは後に軽減されて最後は「任意の夜中礼拝（タハッジド）」に変更されました。一般信徒には後に1日5回の義務礼拝が設定されます。なお本節の注釈によると、イスラームでは崇拝に偏りすぎて生

計の道を怠ることや、日常生活を捨て、社会から乖離することを認めないとあります。
第9節：御主に関する解説が出て、東から西にかけて全事象を司る御方という「一神性（タウヒード）」の基本信条を明示しています。

第10節：多神信者らの嘲笑に忍耐して身を守り、「避ける」の単語があり、これが後に預言者がマディーナへ「移住する＝聖遷（ヒジュラ）」となり、その年を紀元とする暦「ヒジュラ暦（イスラーム暦）」につながります。この「良い避け方」の言葉は今回のコロナ禍にも当て嵌まるでしょう。災禍の本質が何かを追及して疫病を避けるためには何が最も「良い避け方」なのかの方法論に繋がります。専門家によるアドバイスを参考にして外出禁止、社会的距離、自己隔離など、三密の選択がありましたが、自分自身の行為、行動を改めて見直す自省から始まり、何をすべきかの目的を明確にして、その際には時間管理の大切さが求められます。

(4)「第74章：外衣に包る人（全56節）」

命令と指示を具体的に示します。

前章と同じようなムハンマドの状況を表す、第74章、外衣に包る人、が4番目に来ました。この二つの章は内容からみて同じ頃の降臨とされます。関連する伝承が幾つか残っており、ムハンマドは天からの声を聞いた後に天使を実際に目撃して、恐怖に震えながら家族の処へ帰ったとされます。

1. さあ、外衣に包まる人よ。
 2. 立ちなさい。そして警告しなさい。
 3. そして汝の御主を偉大と讃えなさい。
 4. そして汝の衣服を清めなさい。
 5. そして汚れを避けなさい。
 6. また多くを求めるために施し与えるのはいけない。
 7. そして汝の御主のために忍耐しなさい。
-(第74章、1～7節)]

冒頭が呼び掛けから始まる章の中でその対象がムハンマドなのは、73、74と、33ほかの「預言者よ」ですが、その他は一般の人々への呼び掛け「信仰する人たちよ」、「人々よ」となっています。本章でムハンマドは以下の行動をとることが命じられました。

第2節：しっかり立ち上がる。そして、警告することで、人々を正道に導くため啓示を伝えて警告しなさい、という命令です。

第3節：宇宙を創造した偉大な唯一神を崇めて、讃美することです。

第4節：文字通りに、衣服を清潔にすると解釈の他に、修辞表現で“心をきれいにする、罪から清める、善行を行う”の意味があります。

第5節：汚れには、“偶像、背信”の解釈があり、反逆や悪行を避けること。

第6節：喜捨を施して与えるのは、現世での見返りを得るためでなく、来世を考慮して行うこととなります。

第7節：御主のために迫害に耐えること。将来必ず来る約束の日までひたすら耐え忍ぶことです。

第74章の末尾（30節）に地獄で「19」の天使が番人をつとめるという叙述があります。啓示の背景は、地獄にアッラーの兵隊が19人いるとムハンマドが言うが、俺等の人数がもっと多いから勝つと不信仰者らが威張ったからとされます。御主だけが火獄の番人の力量を知っていますが、ここで「19」と数が特定されたのは何故か、その意味が検証されました。

27. 知らないのか、何が地獄の火なのか。
28. 何も残さず何も余さず、
29. 人肌を焼き焦がす。
30. その上に十と九つ。

31.そして獄火の番人を天使だけに我はした。またその数を迷いの種に、不信の者らのために。啓典を受けた人たちには確信させるため。そして信じる人たちには信仰をさらに増す。そして啓典を受けた人たちと信徒は疑いを挟まない。そして心に病を持つ者は必ず言う。「何をアッラーがこんな比喻で欲するのか」。このようにアッラーは誰でも御心のまま迷わせ、また御心のまま導き給う。そして汝の軍勢を知り給うのは主のみである。これも人間への訓戒にはほかならない。(第74章、27～31節)]

数字の「19」は日本でも昔から特別扱いされ、“厄年”と呼ぶ慣習がありますが、約数を持たない「素数19」が不思議にもクルアーンの構成に多く見られる事実は、奇跡(ムアジザ)の一つとされています。普通の人間が数字を意識的に組み入れて文章を作ろうとしても簡単にできる筈がなく、奇跡と云わざるを得ません。

(5) 解説「クルアーンと数字「19」

- (1) クルアーン章の総数は“114章”ですが、これは19の6倍 ($19 \times 6 = 114$) に合致します。
- (2) 最初に啓示されたクルアーン章は、第96章：凝血ですが、第96章をクルアーンの終りから数えてみて下さい。なんと19番目にあたります。
- (3) 最初の啓示である第96章を見れば、19節から成り立っているのが明らかです。
- (4) 第96章の文字数を数えると286文字 ($19 \times 15 + 1 = 286$) となります。
- (5) 第96章で、初めて啓示された部分は(1～5節)ですが、この部分は19単語から成立しています。
- (6) 2番目に啓示された、第68章：筆(1～7節)ですが、38単語からできています。これも ($19 \times 2 = 38$) で19の2倍です。
- (7) 3番目の啓示である、第73章：衣被る人、の(1～10節)は57単語です。これも19の3倍数 ($19 \times 3 = 57$) となります。
- (8) 4番目の啓示が、第74章：外衣に包る人、であり(30節)に「19」という数字が出てくるのです。・・・
- (9) クルアーンには「7層の天、40夜」など数字が明記された節が全部で285箇所あります。これも ($19 \times 15 = 285$) で、19の倍数となります。
これら以外にも類似した多くの数字関連の例があり、その不思議な構成に驚かされます。

(6) 「第1章：開扉(全7節)」

人々の生きる方向性を明確に示します。

クルアーン冒頭の「開扉章」は「聖典の精髓(エッセンス)」として最も偉大な章とされています。「開扉(ファーティハ)」とは“開く、開ける”を意味するアラビア語の動詞(ファトハ)から来ています。ご存知の千夜一夜物語で「開けゴマ(イフタハ・ヤー・スィムスィム)」という命令形の語根と同じ単語から来ています。

開扉章は「7節」から成り立ち、世界中のイスラーム信徒は毎日の礼拝の際に必ず、アラビア語原文のままに朗誦をします。19億人余の信徒が毎日5回の礼拝で、最低17回は7節を繰り返しますから、1年間、6,200回以上も唱える勘定になります。

1. 慈愛の主、慈悲の主、アッラーの御名にて。
2. あらゆる讃美はアッラーのもの、諸世界の御主。
3. 慈愛の主、慈悲の主。
4. 審判の日の大権の主
5. 貴方様のみをわたしたちは崇め、また貴方様のみを救いを求めます。
6. お導きください、わたしたちをまっすぐな道へと、
7. お恵み給うた人たちの道へと。お怒り給うた者たちにあらず、また、迷える者たちでなく。(第1章、1～7節)]

第1節：「アッラーの御名にて」から全宇宙のすべての行動が始まるとされます。人間の知的な営みは、神から与えられた知性によって、神の命令に従って、眼前にある存在物に「名前を付ける作業」から生まれました。そして「言語」を習得して自在に操るようになりました。全知全能の絶対的な存在である神から人間に御言葉「クルアーン」が与えられたことにより、「唯一絶対神の教え」が導かれたのです。

第2節：「あらゆる讃美はアッラーのもの（アルハムド・リッラー）」という神への讃美です。世界のあらゆる存在物は「アッラー」が創造したのですから、創造主を「讃美（ハムド）」してその栄光を讃えるのです。創造主は永遠の過去から未来永劫に存在してあらゆる讃美の対象となります。創造主は人間界だけでなく多くの自然界、さらには狭い有限の地球に留まらず広大無辺の大宇宙に複合的に構成される無数の「世界（アーラム）」を総括し君臨しています。

第3節：「創造主」についての説明です。御主は“慈しみ”を意味する「ラハマ」から派生した「慈愛（ラフマーン）」と「慈悲（ラヒーム）」の属性を持ちます。「慈愛」とはより包括的な慈愛で世界と人類に対する慈愛で、大自然に存在する被造物すべてに差別なく公平に与える慈しみと解され、水平的な広がりとも捉えられます。「慈悲」はより狭義に、信仰者一人ひとりに与える慈しみで、垂直的な深みと解せます。例えば、人間の平等、自由、権利などが慈愛に属し、運と不運、各人の差異などが慈悲という解釈です。

第4節：「審判の日」とは、将来に必ず起きる恐ろしい天地終末の日に行われる最後の審判のことを指します。すべての人間は現世の行為に対する善悪の「審判」を受けてから、永遠の天国、地獄行きが決定されます。現世と来世を統率して判決を司る「主権者（マーリク）」が創造主であり、審判の証拠となる「行為の記録」は光で創られた天使が、現在の映像・録音技術のように克明に記録しているとされます。

第5節：創造主に対して、人間は誠心誠意を尽くして“仕える”のが当然であり、唯一神のみに助けを求めます。崇める対象として人間やその他の物を拝むことは多神教や偶像崇拜となり、許されません。

第6節：正しい道へお導き下さいとの切なる祈願です。その理想的な「道」は曲がらずに“真直ぐ”で目的地へ一直線に向かう道です。

第7節：人間が採択して歩む「道」には、3種類があると明快に教えます。正しい道は、創造主が恵みを与える道であり、世界の秩序と摂理を守り抜いて生きる方向です。反対に“御怒りを受ける”のは、創造主が創った見事な大自然の秩序や道理を破壊する者たちが歩む道であり、現世と来世において神の罰が下されます。3つ目の「惑いさ迷う道」とは、唯一神の教えを受けても理解せずに、自分の都合と狭い見地に閉じこもり思い悩み迷う人たちが辿る道です。

こうして第1章を朗読し終えた最後に「アーミン」と全員の合唱が慣行となっており、“祈りを受け入れてお応え下さい”との意を含みます。

「あらゆる讃美はアッラーのもの（アルハムド・リッラー）」が示唆するのは、一つの地球号の上生きる全人類が、自国を第一優先とか、自国の領土所有権を主張する、などを捨て去り、地球上の全所有権が創造主に属するという「事実」を認識する必要性です。全宇宙が実存するのは「人類のため」だけではないという事実の確認から始まり、被造物の一つに過ぎない人間が主張して止まない「人類至上主義」の否定も意味します。自分さえ良ければとの私利私欲を排除するために「人類至上主義」を見直すことが不可欠です。これは人間が考え出して固執する「主義、主張」を超越した基本的な考え方であり、現在の各国が目標として掲げる「資本主義」「社会主義」などの偏狭なイデオロギーを正すものです。

創造主をつねに確認し讃美を続けることで大宇宙の摂理に沿う確信が得られ、人間が自立して進むべき道が明らかとなり、創造主に愛でられる方向が開けてくるというのです。

以上、「開扉章」の内容を簡単に説明しましたが、深い解釈は古今の碩学による多くの文献がありますのでそれらに譲ります。